



シリーズ

多文化共生を語ろう!

シリーズ3回目となる今回は、NGOでの海外協力活動を経て、現在、当協会発行の在住外国人向け情報紙の編集や、国際協力・国際理解教育など多分野で講師として活躍されている尾嶋さんです。

「多文化共生の地球社会」を目指して

国際教育コーディネーター 尾嶋 佐和子

近年、「多文化共生」という言葉を頻繁に目や耳にするようになってきましたが、たいていの場合、日本国内の「地域における多文化共生」を念頭においていた言葉として使用されているようです。

日本全体の外国人登録者数は、2010年末現在で213万人余（日本の人口比1.67%）となっていますが、既に帰化している外国出身者、在留資格を持たない外国人も含めると、私たちの身の回りには更に多くの「いわゆる外国人」が住んでいることになります。

様々な異文化を持つ人たちが共に暮らす地域は「世界の縮図」と言えます。多くの外国出身者と親しく交われば、彼らを通して「世界」が見えてきます。

世界には、現在193か国（国連加盟国）があり、今年10月末現在で70億人が住んでいると推定されています。異なる言語や民族の数となると、とても数え切れないのでしょう。様々な文化を持つ様々な民族が、互いに争うことなく尊重し合い、助け合って、この地球上で平和に共生していくことが「人類究極の夢」だと、誰もが思っているはずです。

ところが、この地球上から、飢えや争い、迫害、犯罪などの不幸な出来事が絶えることはありません。時々、大災害も追い討ちをかけます。そこで、国連や各国のODA（政府開発援助）、国際協力NGO（非政府組織／ボランティア団体）などが、世界各地で支援や問題解決のための活動に取り組んでいるのですが、私たちはその事実や様子をあまり知らないで過ごしていませんか。例えば、最近、トルコで起きた地震の被災者を支援するため現地に駆けつけていた「難民を助ける会」のスタッフ（男性）が、余震の犠牲になって亡くなったとのニュースを聞いて初めて、日本のNGOの国際協力活動の一端を知ることになりました。

このように、「リスクを冒しても、人は、より不幸な人を助けないではいられない」という人間本来の本能のうえに、世界は成り立っているのだと、改めて認識させられます。

3.11（東日本大震災）の未曾有の悲劇に見舞われた日本は、142の国と地域、39の国際機関をはじめ、世界各国のNGOや個人から多大な支援を受けました。ふだんは日本が支援している小さな国や貧しい国々からも、精一杯の支援物資や支援金などが届けられました。また、多くの個人や団体がボランティアで駆けつけました。私たちは、不幸な出来事を通して、「助け合いはお互い様」、「世界はつながっている」、「世界は一つ」など、本来「世界があるべき姿」を実感することができました。

「多文化共生」を語るとき、私たちは、「地域社会」の一員であると同時に、この「地球社会」の一員である「地球市民」であるという視点も忘れず、世界中の人々との「共生」を目指して生きていきたいものです。